

設計演習 III A

07 都賀川沿いに建つく子育てスクエア>

開講年次：学部3年生第1クオーター

[担当教員]

楢橋修（准教授）

小林直紀（安井建築設計事務所） 中江哲（鹿島建設）

[Teaching Assistant]

向上沙希(A68) 谷口浩都(A68) 小池晃弘(A68)

■課題の概要

現代都市に暮らす人々にとって、子供を産み育てるには様々な課題がある。要因としては核家族化による地縁の希薄化、女性の社会進出による共働き夫婦の増加、単親世帯の増加などが挙げられる。子育ての負担が親に集中することが、都市でのライフスタイルとの間でストレスを生み、育児ノイローゼや幼児虐待といった招かれざる事態の遠因ともなっている。

従来より社会における「発達保障」の場として児童福祉施設は整備されてきているが、現代のような家族観、自然観が多様化する時代において、都市は子供達に、また子供を育てる親たちに、どのような場所を提供すればよいだろうか。本課題では以下に挙げる3つの方向性からひとつを選択し、子供のための空間、都市における福祉のあり方について考えてもらいたい。

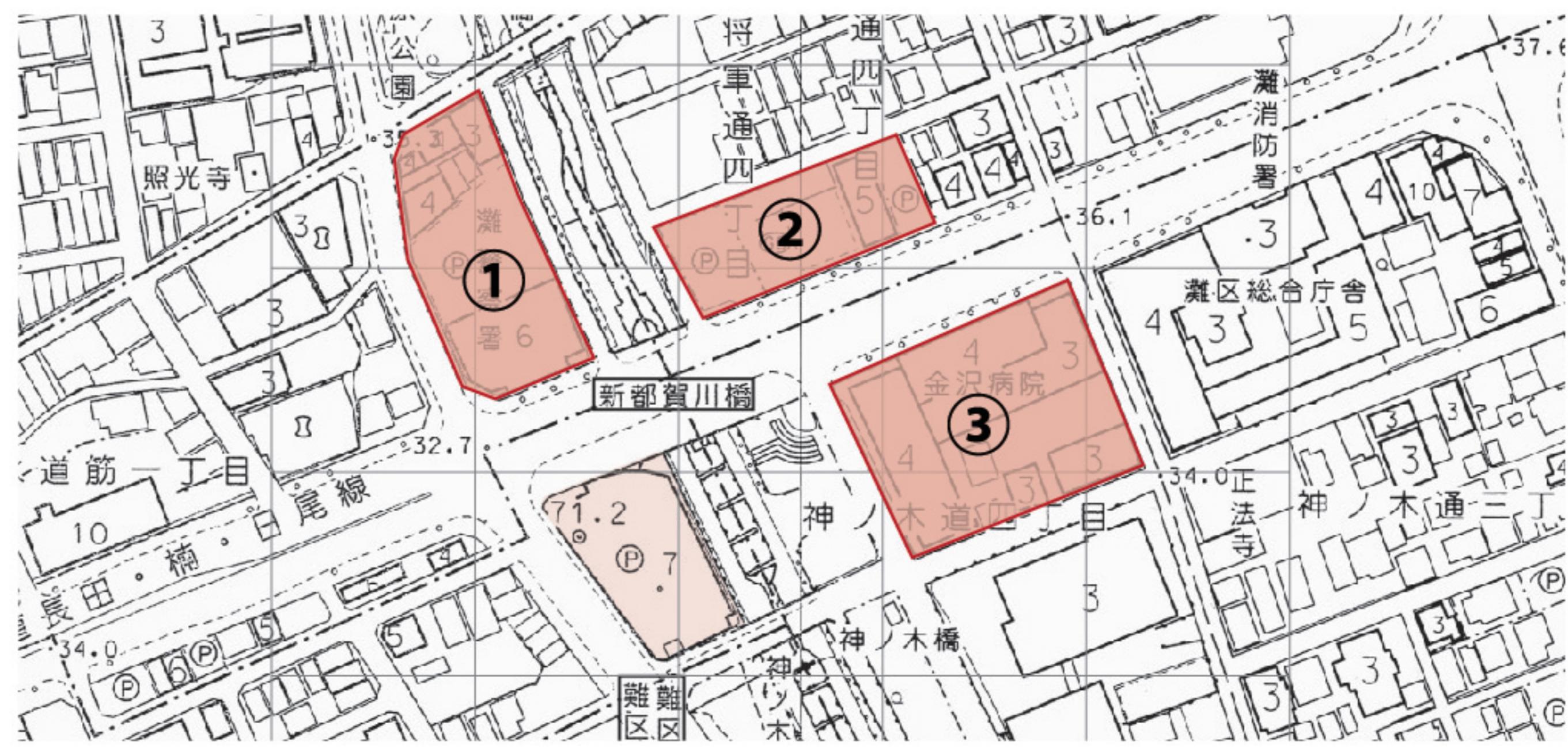
- (1) 次世代をになう児童達が、健やかに育つための支援環境として、自由に利用ができる施設。
- (2) 子育てに関わる様々な人が自由に集まり、交流するための施設。
- (3) 乳幼児の発達保障の場、生活空間を提供する施設。
- (4) 3つの施設が、交差点を中心に子育てスクエアとして一体的な空間をつくるように、それぞれが尊重すべき共通のデザインの方針（デザインコード）を設定することが望ましい。

■敷地

- (1) 別図に示すような、灘区都賀川沿いの敷地を想定する。
・「児童館」敷地①約 2030 m²=東西 30m × 南北 70m(変形あり)
・「子育てカフェ」敷地②約 1550 m²=東西 62m × 南北 25m
・「保育所」敷地③約 3100 m²=東西 62m × 南北 50m
・用途地域等(近隣商業地域 / 建蔽率 80%, 容積率 400%, 防火地域)
- (2) 河川公園に隣接する敷地で、周辺は住宅地。

■建物概要

- ・「児童館」：延床面積 1000 m²前後。構造、階数は自由とする。
- ・「子育てカフェ」：延床面積 800 m²前後。構造、階数は自由とする。
- ・「保育所」：延床面積 1000 m²前後。RC 造、鉄骨造、または、木造（準耐火建築物）。階数／自由。

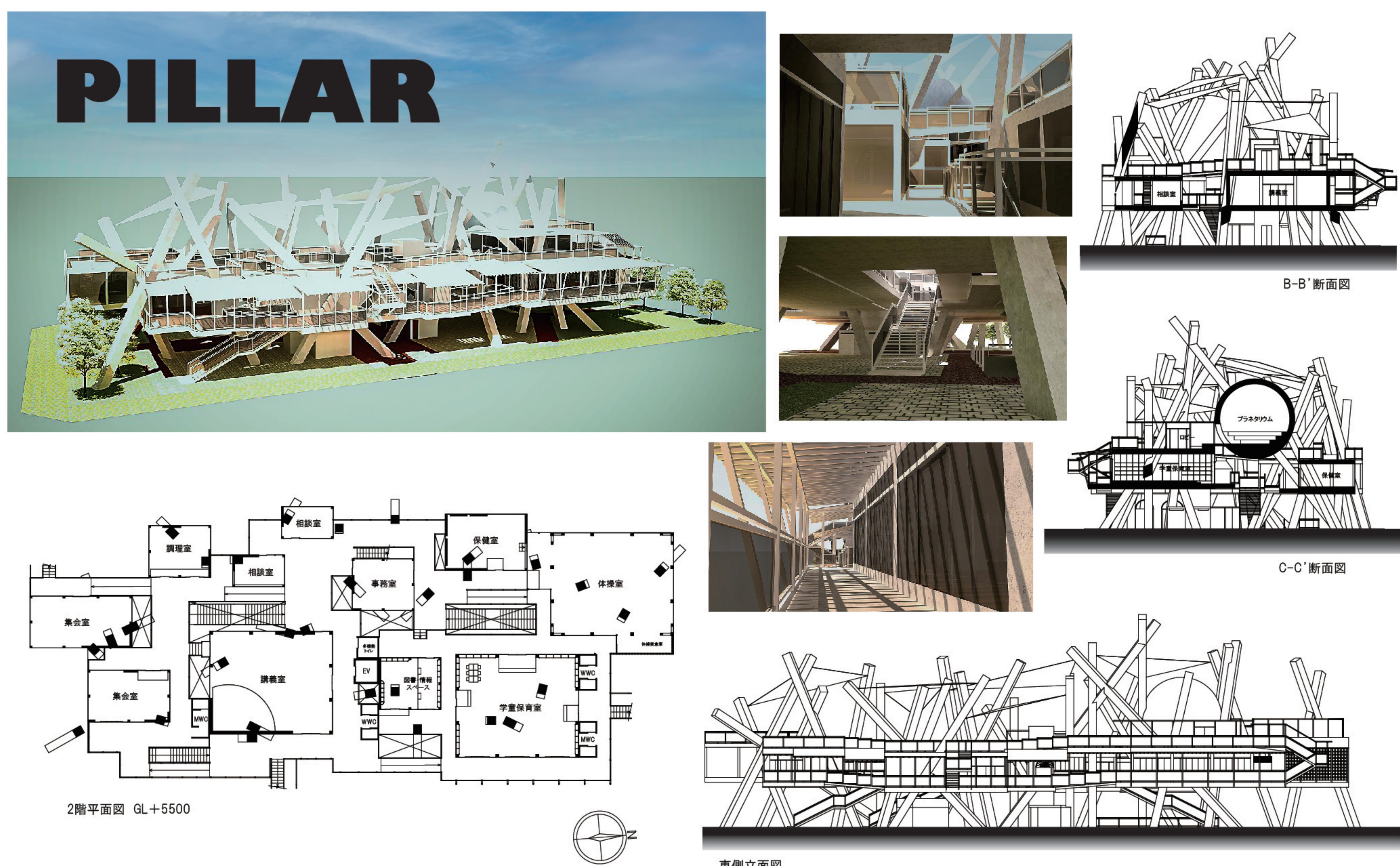


課題；敷地

PILLAR

森祐樹

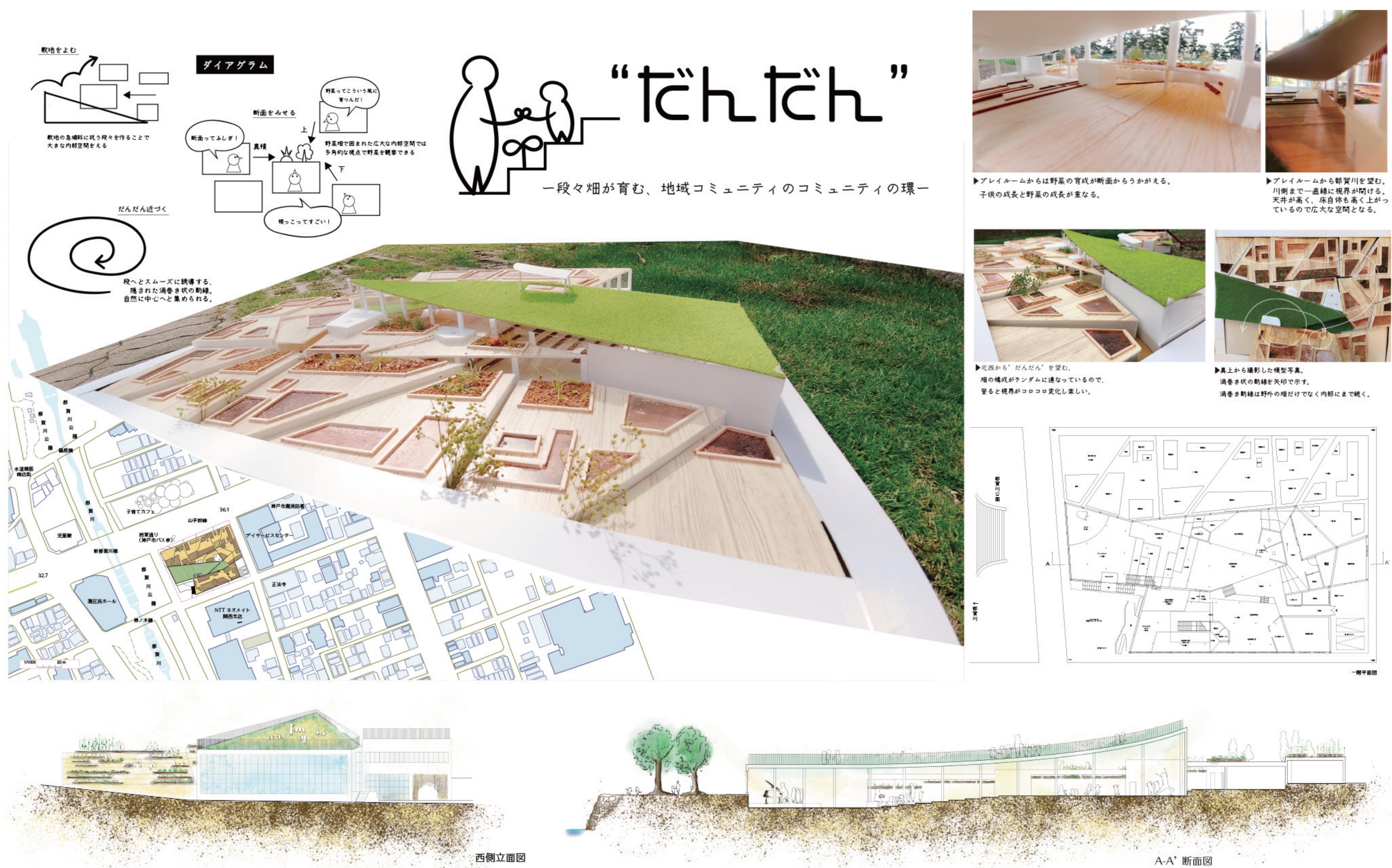
様々な方向に伸びる柱で所要室を浮かべて、室同士をバルコニー やスロープ、階段でつなぐことで生まれた空中の路地のような空間を回遊する中で、児童は様々な人、景色、出来事と出会い、成長していく。そんなツリーハウスのような児童館を目指した。



"だんだん"-段々畑が育む、地域コミュニティの環-

松岡絢加

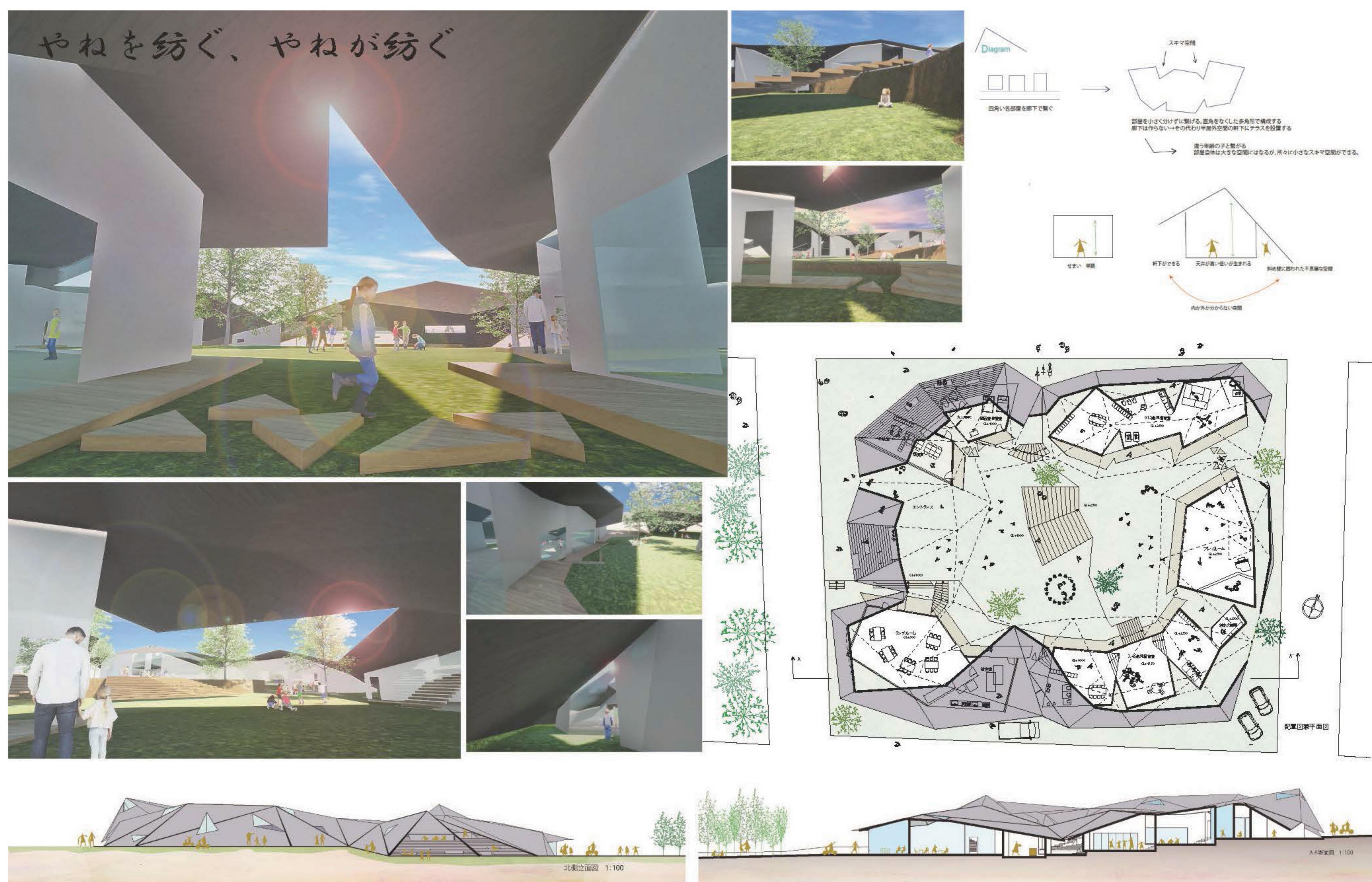
敷地の傾斜に逆行して高くなる段々状の畑を屋根として、その内部には保育園の機能を埋め込む。それにより生じた断面から野菜の成長を多角的に観察できる新体験をもたらす。またこの野菜畑は、子供たちの食育は勿論、地域コミュニティを育むきっかけにもなる。



やねを紡ぐ、やねが紡ぐ

岩橋美結

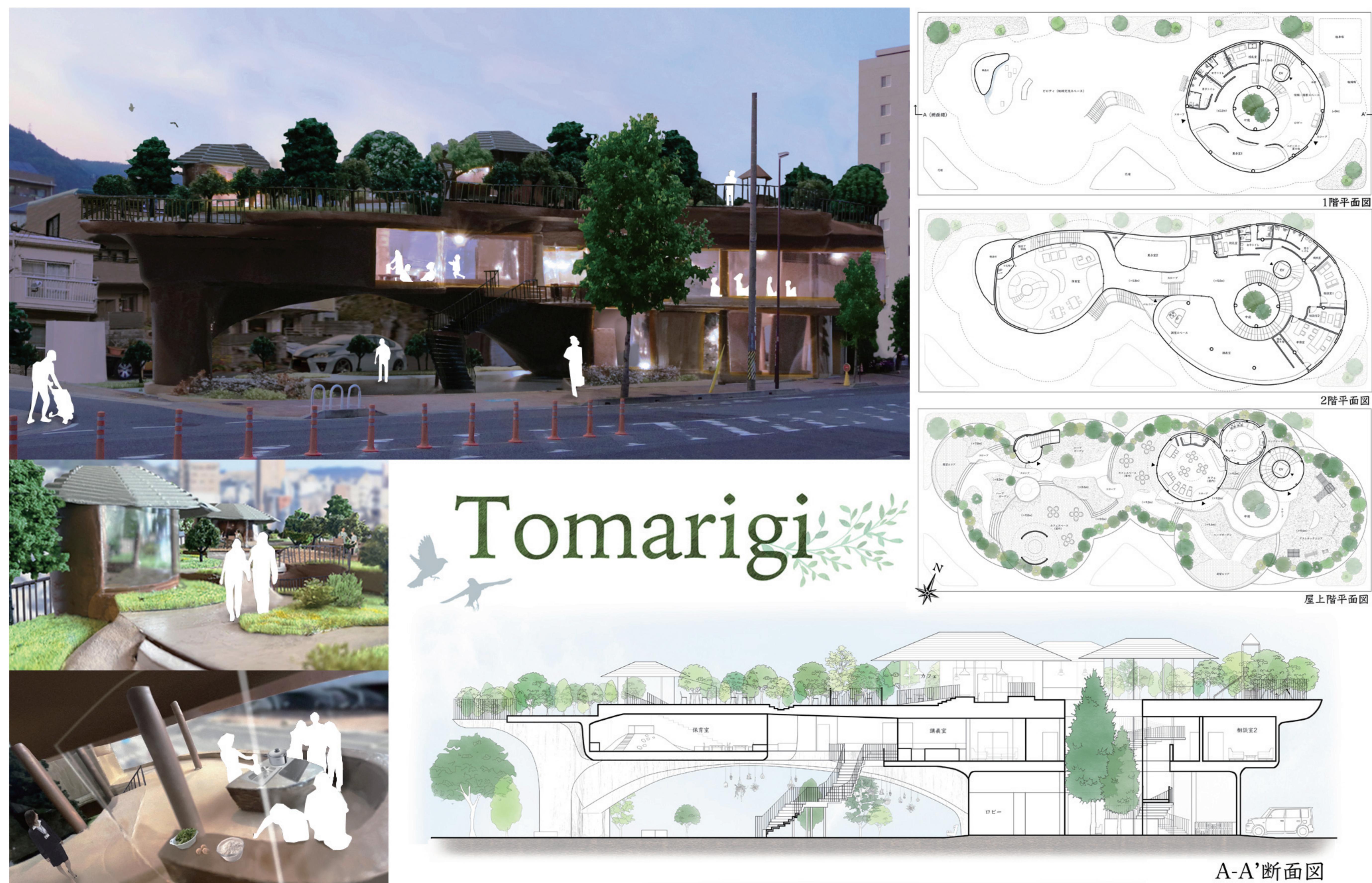
様々な三角形を組み合わせた大やねが保育園をぐるりと囲んでいる。内は雨の日も思いっきり走り回れる大きな軒下、外は誰でも登ったり腰かけたりできる丘のようになっている。このやねが、こどもとこども、こどもと家族、家族と地域、それぞれを紡ぐ拠点となる。



Tomarigi

道免尚子

子育てに関わるあらゆる人が意気込まずに立ち寄れる“とまり木”のような施設。日常から切り離された屋上のカフェで落ち着き、豊かな緑と川風に癒され、また様々な人々と関わりながら力を取り戻して、再び日常に戻っていくようなカフェを設計した。



森に育つ

眞下健也

乳幼児は成長速度が著しいための児童ごとに大きな能力差が生まれ、それぞれの発達段階に応じた居場所を見つけられることが重要である。そこで、様々な生物がそれぞれの居場所に生息して多様な生態系をつくることを受容する森の構造を建築へと落とし込んだ保育園を提案する。

